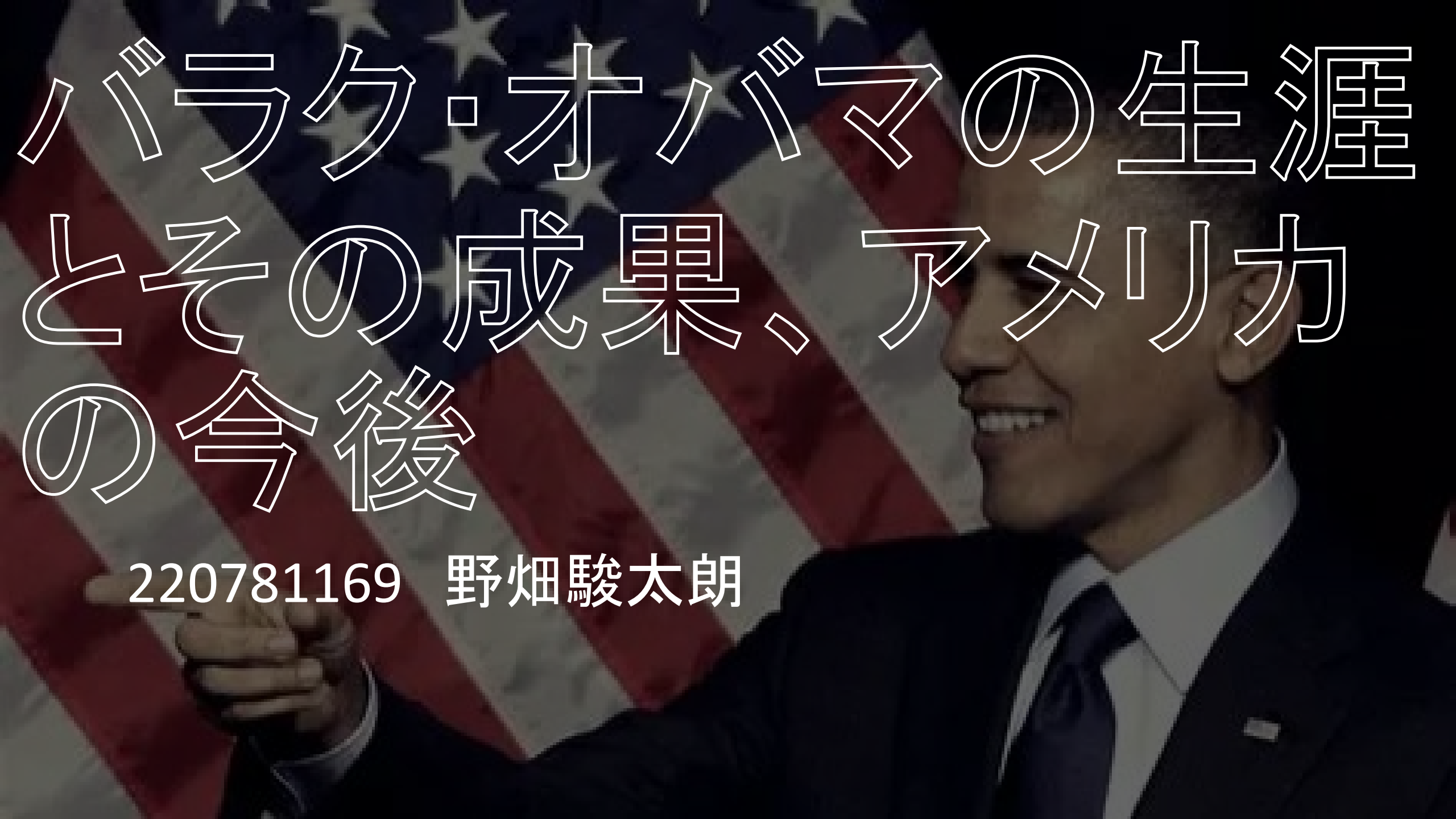


バラク・オバマの生涯 とその成果、アメリカ の今後

220781169 野畑駿太郎



はじめに

ア.a)バラク・オバマは、2009年にアメリカ合衆国第44代大統領に就任

I)「戦後アメリカの役割の再定義」

b)オバマ就任当時、アメリカは深刻な疲弊状態

C)2001年の米同時多発テロ以降、ブッシュ政権下

I)→アフガニスタン戦争とイラク戦争

II)膨大な人的・財政的負担

III)明確な成果無し



Ⅲ)国内では金融危機

Ⅳ経済不安が拡大

c)オバマは、「無制限な軍事介入からの脱却」&「国際協調の回復」を掲げ登場

Ⅰ)オバマは、多国間主義と抑制的な力の行使を重視

Ⅱ)イラクからの段階的撤退や、アフガニスタン撤兵を視野

Ⅲ)2013年にはアメリカは「もはや世界の警察官ではない」と発表

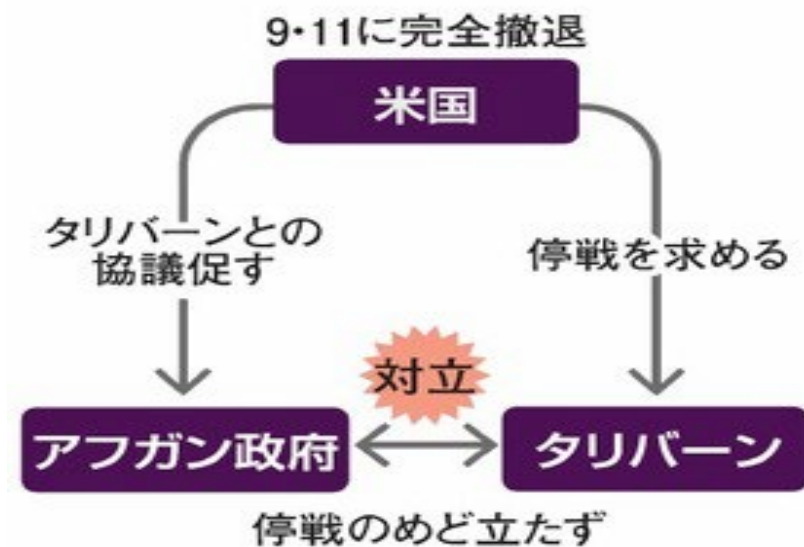
Ⅳ)シリア内戦への対応やイラン核合意において賛否両論

Ⅴ)対話による安全保障を志向

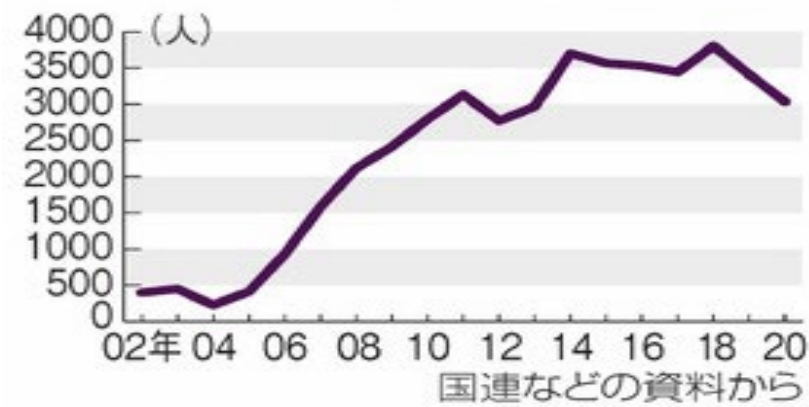
d)政権後半には中国の台頭

Ⅰ)「アジアへのリバランス」政策

Ⅱ)その実行には限界が存在



アフガニスタンの民間人死者数の推移



e)アジアへの
リバランス(ピ
ボット)政策と
は?その限界
とは?

I)軍事・外
交・経済の重
心を中東から
アジア太平洋
へ移動

II)しかし、イ
ラク・アフガニ
スタン問題や
中東情勢への
対応から対中
戦略が不十分

III)この点が
点は限界とし
て指摘

IV)米中対立
の出発点

A photograph of the Mount Rushmore National Memorial in the United States, showing the carved faces of four US presidents (George Washington, John Adams, Thomas Jefferson, and James Monroe) on a granite cliff face. The sky is blue with some clouds, and green pine trees are visible in the foreground.

第1章 オバマ誕生 時のアメリカ

1. アメリカ大統領とは

ア) 大統領制度は、アメリカ、ブラジル、韓国、ロシアなどで起用

a) 政治制度の基盤には、「連邦制」と「権力分立制」の二つが存在

b) 連邦制→国家権力を連邦政府と州政府に分け、それぞれが主権を所持する体制

c) 権力分立制→立法・行政・司法の三権を分立
I) 権力の集中や濫用を防止

d) 大統領選挙は国民の直接選挙 ×

I) 各州の選挙人による間接選挙で施行

イ) 初代ジョージ・ワシントン(在任1789～97年)アメリカはイギリス支配下でフランスと領土戦争、大半が英領→防衛費や課税などの不満から独立戦争が勃発→勝利後、行政機構の基盤を整備

a) 第7代アンドリュー・ジャクソン(在任1829～37年)ジャクソンは初の非エリート層出身大統領、普通選挙を実現、政治参加を拡大→官職交替制導入や職業政治家の登場で政党組織化を推進

b) 第16代エイブラハム・リンカーン(在任1861～65年)関税や奴隷制から南北対立が激化、南北戦争が勃発→北部が勝利、リンカーンは連邦を維持、奴隷解放を実現、分裂気味の連邦を維持

c) 第32代フランクリン・ルーズヴェルト(在任1933～45年)1929年の世界恐慌で失業や賃金低下が深刻化→ルーズヴェルトはニューディール政策で雇用創出や社会保障を整備、第二次大戦と戦後処理でも主導

このようにアメリカの大統領制は、歴代大統領の考え方や時代によって需要を変化

Ⅱ .バラク・オバマの生い立ち

ア.a)誕生と家族の背景 1961年、ハワイ州ホノルルに誕生母：スタンリー・アン・ダナム（白人・カンザス州出身、人類学者）父：バラク・オバマ・シニア（ケニア・ルオ族出身、経済学専攻）両親はハワイ大学のロシア語クラスで出逢う

I)1960年に結婚異人種間結婚は当時まだ珍しく、社会の偏見の中での結婚

b)母アン・ダナムの生い立ち 家系には北軍の兵士・奴隷廃止論者・奴隷所有者も存在父スタンリーは第二次世界大戦従軍、母マドリンは爆撃機工場勤務

I)病弱・転校が多く孤独な幼少期を経験、男性的な名前「スタンリー」が原因でいじめの経験、学業優秀で16歳でシカゴ大学入学許可 → のちにハワイ大学へ

c)父オバマ・シニアの生い立ち ケニア・アレゴ村出身、山羊の世話&通学

I)父フセイン・オニャンゴ：白人の専属コックとして成功

Ⅱ)シニアは猛勉強の末に大学入学資格を取得奨学金でハワイ大学へ留学

Ⅲ)アンと邂逅、結婚は民事的手続きのみ（家族行事なし）



d) 幼少期のバラク 名前の意味:「バラク=恵まれた」「フセイン=美しい」

I) ハーバード大学を卒業後父は帰国、母子はハワイに残留、両親は離婚、母はインドネシア人ロロ・ソエトロと再婚一家でジャカルタへ移住異国文化の中での生活、環境の変化に順応

e) 母の教育方針とハワイ帰還

I) アンはロロとの価値観の違いから不和

II) アンは「息子をインドネシア人ではなく、アフリカ系アメリカ人として育てる」と決意

III) 自ら労働 & 教育に全力を投資→オバマ10歳の時、単身でハワイに帰還(祖父母のもとへ)



Ⅲ.オバマの青年期

ア.a)プナホウ・アカデミー時代 名門「プナホウ・アカデミー」に編入(ハワイ最高のエリート校)
白人中心の環境で人種的孤立を経験

I)祖父母と同居、バスケットボールに熱中、「あんなニグロに負けるな」という差別発言を受
信→自身のアイデンティティに深く葛藤

b)青年期の葛藤と逸脱

I)黒人の友人たちと共に精神的な安らぎを求める酒・煙草・マリファナ・ヘロインを開始

Ⅱ)のちに大統領選で批判材料となる回顧録で「ポットヘッド」として過去を告白

Ⅲ)その後、再び学業へ再起 ⑨ポットヘッドとは「マリファナ(大麻)を常習的に摂取」

c)オクシデンタル・カレッジ時代 1979年、カリフォルニア州ロサンゼルススのオクシデンタル・カ
レッジに入学

I)入学理由:ハワイで知り合った少女がLA出身(個人的動機)南アフリカのアパルトヘイト反
対運動に参加、学内で演説を発表「言葉で人を起動」を実感→これが「語りの力」の原点

d)コロンビア大学編入とニューヨーク時代 コロンビア大学への編入制度を利用、
ニューヨークへ移動(1981年)ハーレム近くで黒人文化と接触

I)政治学を中心に、1983年に卒業教員からも高い評価を享受 ⑨ハーレムと
は地名:アメリカの黒人文化の中心地

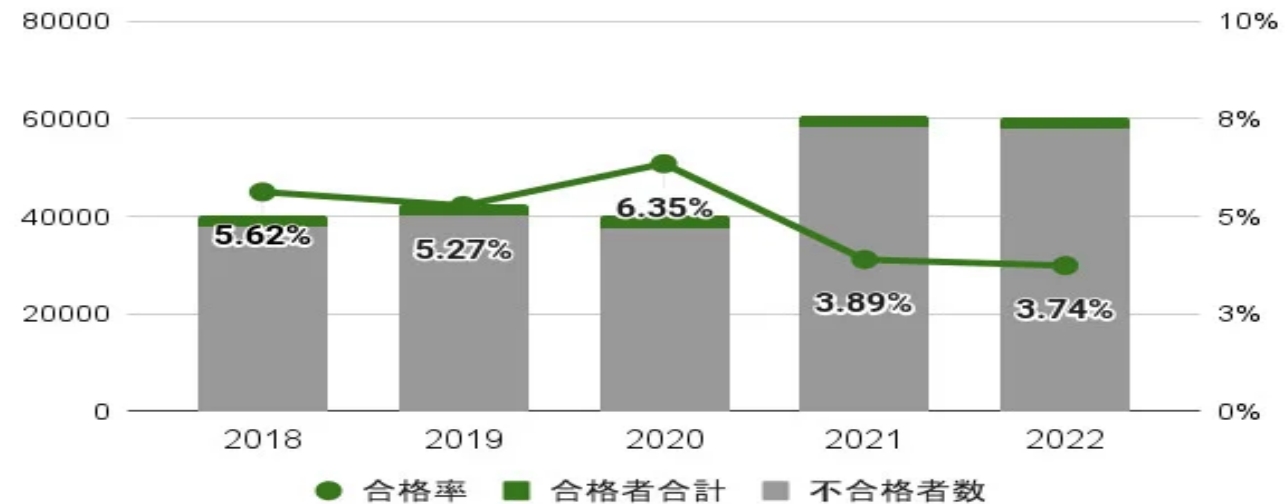
e)社会への志向 周囲は大学院や一流企業を目指す中、「地域社会のために行
動」という目標

I)格差拡大・社会の冷淡さに問題意識

II)「社会を変えたい」という強い使命感を所持



コロンビア大学 合格率の推移



第2章 オバマ大統領就任前 I .コミュニティー・オーガナイザーとして

ア.a)オーガナイザーとの邂逅 公民権運動の記録映画を鑑賞地域社会への使命感を獲得

I)地域は“贈り物”ではなく、“建造物”という「オーガナイザー」という職業との出会い

II)その道を志すトップダウンではなく、“草の根”から社会を変革

III)その様なリーダー像に共感

b)ニューヨーク時代の葛藤「ビジネス・インターナショナル社」に勤務(唯一の黒人社員)

II)多国籍企業向けの経済調査を担当理想の「社会貢献」が希薄化

III)異母弟の死をきっかけに人生を再考 → 退職を決意

c)シカゴでの地域活動 ジェラルド・ケルマンのもと、シカゴ南部の黒人地域で活動開始

I)教会・地域団体と連携、住宅問題・教育格差の改善に尽力、行政との交渉の中で「法の力」の必要性を痛感

II)法的知識が正義実現に不可欠だと理解



d)ハーバード・ロー・スクール時代 1988年、ハーバード・ロー・スクール入学『ハーバード・ロー・レビュー』に論文掲載(学生運営の全米最高峰誌)

I)人種差別問題に対処、学生運動にも参加1989年、初の黒人編集長に選出 → 全米で注目 ⑨ハーバード大学の法科大学院

e)ミシェルとの出会い & 卒業後の進路

I)シカゴの「シドリー・オースティン」でインターン → ミシェル・ロビンソンと出会う

II)1991年、優等で卒業大手事務所の勧誘を拒否、人権派法律事務所「マイナー・バーン・ガーランド」へ人種差別訴訟や地域法務支援に従事 ⑨法律事務所

f)教育と理念の融合

I)シカゴ大学ロー・スクールで非常勤講師として活動

II)実務と理論を融合し、若者に「社会変革の意義」を伝達

III)自身の成功より「社会的公正と政治改革」を目標

Ⅱ. 民主党予備選 オバマ VS ヒラリー・クリントン

ア.a)政治家としての第一歩 シカゴで有権者登録運動を展開(6か月で約15万人登録)

I)1992年、黒人女性上院議員誕生に貢献 II)1995年、初の公職出馬 III)1996年、州上院議員に当選(34歳)選挙資金改正法や死刑制度改革法などを推進 IV)弱者への思いやりを念頭に政治信条に活動

⑨企業や団体の不透明な政治献金を制限、誤診を防ぐための取り調べ強化、DNA鑑定の義務

b)イラク戦争反対と政治的転機

I)2003年、イラク戦争反対のスピーチを決意、当時の世論に反抗

II)若者や学生層から共感を獲得

III)2004年、民主党予備選で州全体の52%・黒人票95%を獲得、「Yes We Can」の初使用

c)上院議員へと台頭

I)2004年、連邦上院議員に当選(43歳、全米で2番目の若さ)

II)メディア露出が急増、国民的人気を獲得「新しいリーダー像」として注目

III)黒人だけでなく白人層にも“容認の黒人”として浸透

d)ヒラリー・クリントンとの対決 2008年民主党予備選:オバマ vs ヒラリー
ヒラリー: 中年女性・中道派・労働層・イラク賛成派が支持

I)オバマ: 若者・知識層・黒人・左派が支持
戦いは「人種」&「世代・ジェンダー・価値観」の対立を象徴

e)革新的な選挙戦略 SNS・メールを通じて草の根運動を構築

II)選挙資金の約43%をオンラインで調達
ボランティア主導で全国ネットワークを形成

III)政党組織から独立

IV)“市民参加型キャンペーン”を確立

f)黒人を超越“統合の象徴” 父はケニア出身、奴隷制の歴史を非所持

I)白人社会に“許容される黒人”

II)「黒人初」× 「黒人にも白人にも希望を与える存在」◎

III)“融和の象徴”として支持を獲得

Ⅲ.オバマVSジョンマケイン本選挙での共和党との戦い

ア.a)2008年大統領選の背景 2008年：民主党オバマ vs 共和党マケインの対決9月、リーマン・ブラザーズ破綻

I) 戦後最大の金融危機から現職ブッシュ政権の支持率は30%以下、イラク戦争・京都議定書離脱などへの不満が上昇、有権者は「変化」「希望」を希求

項目	バラク・オバマ	ジョン・マケイン
出身	ケニア人の父とカンザス出身の母	ヴァージニア出身の軍人一家
象徴	多様性・変革・希望	保守・忠誠・伝統
支持層	若者・都市部・マイノリティ	南部白人・退役軍人・保守層
イメージ	“新しいアメリカ”の象徴	“古き良きアメリカ”の代表

b)オバマ陣営の戦略 「高地南部(ヴァージニア・ノースカロライナ等)」への浸透
I)戦略共和党地盤へも積極的に出向、戸別訪問・有権者登録を実施SNS (Facebook, YouTube)を駆使、草の根運動若者・無党派層への訴求に成功

c)オバマの演説とメッセージ 「明確な使命の時にのみ軍を派遣」イラク撤兵・国際協調・多国間主義を重視
キング牧師の「I Have a Dream」を引用「我々は一人では歩行困難だ。常に前へ前進」と多様性と団結の訴え

I)感動的な演説で国民の心を獲得

d)マケイン陣営の失速 「経済の基盤は強固」と発言

I)国民の実感と乖離 軍人としての誠実さは評価

II)有権者の63%が「経済政策」を最重視

III)そのうち過半数(54%)がオバマに投票

e)歴史的勝利とその意義 得票率:オバマ54% vs マケイン46%8年ぶりの民主党政権復活(上下両院も多数)

I)黒人初のアメリカ大統領誕生世界中が“変化の象徴”祝福アメリカ社会「分断の克服」への希望の光



第3章 オバマ政権 I. 第一次オバマ政権の政策とその背景



ア) 第一次オバマ政権 (2009～2013年)

a) 2008年のリーマンショック後の深刻な経済・金融危機への対応

I) 中間層重視の「ボトムアップ型経済成長」を掲示

II) 税制・医療・教育・エネルギー分野における構造改革を構想

III) しかし就任直後、危機は急速に悪化

IV) 政権は緊急的な景気対策を最優先

b) オバマ政権は、危機対応と構造改革を対立×

I) ◎ 構造改革を危機克服の一環とする方針を採用

イ)最大の課題は金融危機への迅速な対応

a)2009年2月に総額7870億ドル規模の景気刺激策（ARRA）が成立

b)金融機関や自動車産業への公的資金注入も実施

I)失業率は一時10%を通過

II)その後改善,退任時には4.7%まで低下

ウ)政府主導の景気刺激策に共和党の強い反発

a)金融機関救済への不満「ティーパーティー運動」が拡大

b)経済政策では、格差是正の税制改革が推進

I)所得上位層への減税を再確認

II)中低所得層への減税や税額控除から所得再分配を強化

エ)医療保険改革（オバマケア）では保険未加入者の削減と医療費抑制

a)保険加入義務化や低所得者向け公的医療扶助制度拡充を実施

b)貧困対策は、フードスタンプ（SNAP）の拡充

I)低所得層の生活を支援、景気悪化下での社会的安全網



Ⅱ. 第二次オバマ政権

ア) 2013年に発足した第二次オバマ政権は、第一次政権とは別個の政策

a) 外交・安全保障分野においてアメリカの国際的役割の再定義

イ) 国内では共和党との対立が深刻化、財政・経済政策の運営は大きな制約を所持

ウ) 外交面で最大の成果、2015年に成立したイラン核合意

a) アメリカは英仏独などと協調、イランに対して核開発の大幅な制限と査察容認を要求

b) 見返りに経済制裁を段階的に解除

エ) この合意は、軍事力×国際協調と交渉による問題解決◎のオバマ外交の象徴



オ)キューバとの国交正常化

a)1961年以来断絶中の両国は、2015年に半世紀ぶりに国交を回復

I)共和党からは反発

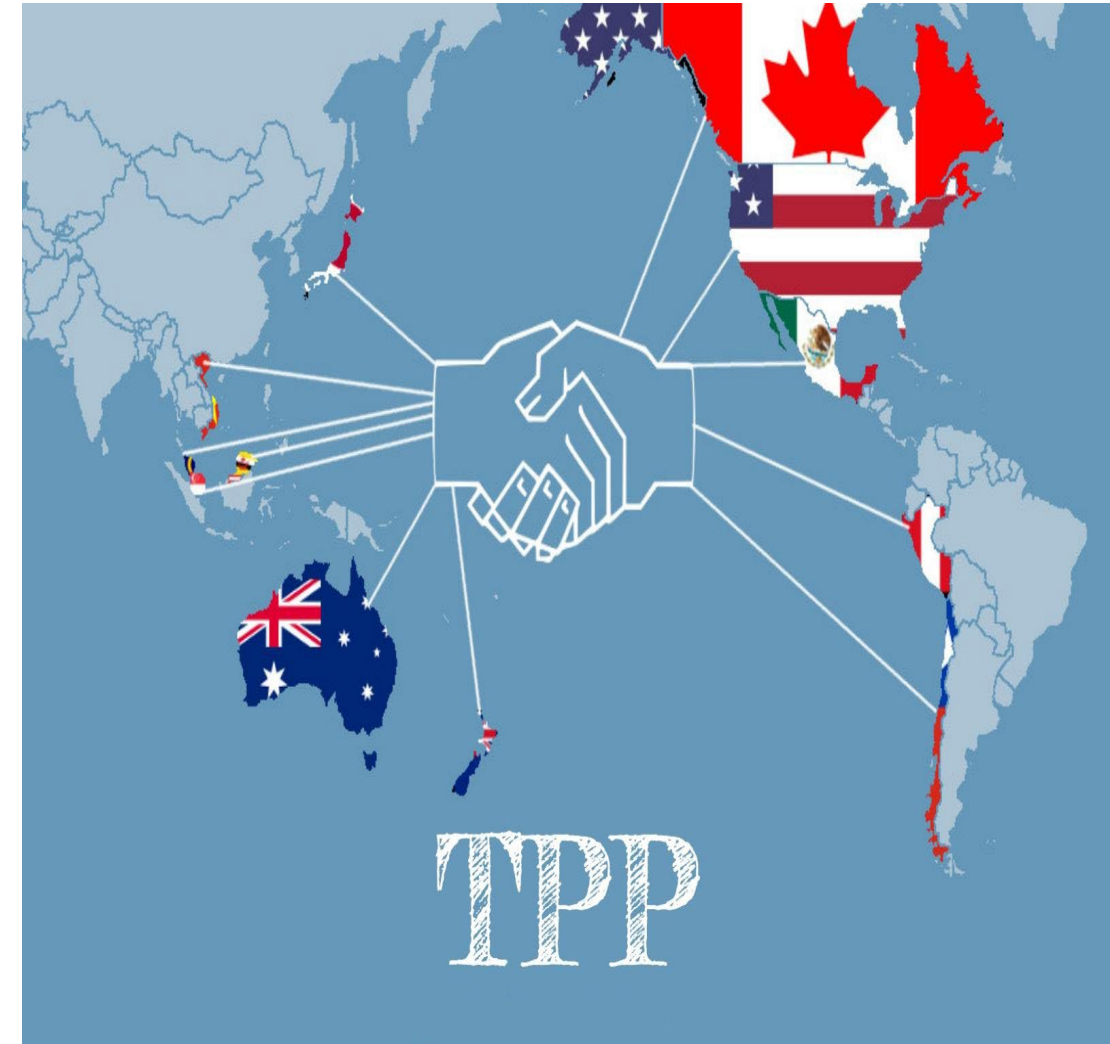
II) 世論や経済界からは概ね支持、対話による関与を重視

キ)オバマは、TPPの推進や気候変動対策に尽力

a)パリ協定の成立に大きく貢献

ケ)国内経済は共和党多数の議会により財政出動が制限

a)減税や輸出促進、規制緩和による景気回復を模索



Ⅲ.オバマ政権下の日米関係



ア)日本をアジア太平洋地域における最重要同盟国と認定

イ)一方、中国の台頭を理解

a)日米同盟を基軸、中国との過度な対立を回避

ウ)2009年9月に日本で鳩山由紀夫内閣が成立

a)普天間基地移設問題の迷走、東アジア共同体構想の提唱

I)日米関係は一時的に冷却化

b)アメリカ側は同盟の信頼性低下を懸念

I)両国関係は緊張体制

エ)2011年の東日本大震災

a)米軍は大規模な支援活動を展開

I)人的・物的支援 & 米国民から多額の寄付

II)日米同盟に価値と信頼



才)一方、2010年の尖閣諸島沖中国漁船衝突事件、
2012年の尖閣諸島国有化

a)日中関係は悪化

b)これに対し、アメリカは日米安全保障条約第5条が
尖閣諸島に適用を明言

I)中国による現状変更の試みを牽制

カ)2014年にはオバマ大統領自身が同条約の適用を
公に表明

a)同盟の抑止力は強化

キ)2012年末に発足の安倍晋三政権の下、日本は防
衛政策を大きく転換

a)集団的自衛権の限定的行使容認や安全保障関連
法制を整備

ク)TPP参加や、安倍首相の米議会演説、オバマ大統
領の広島訪問

a)経済・歴史認識の面でも協力

第4章 現代アメリカの混迷

I .オバマ退任後のアメリカ:トランプとバイデン

ア)オバマ政権は2016年に8年間の任期を終了

a)当時、失業率は4.6%と低水準で経済指標上は安定

I)「アメリカは悪い方向へ進行中」印象の国民は62%に到達

b)特にグローバル化の影響で製造業が衰退

I)中西部・南部の白人労働者層は、経済的疎外感や移民への不満が強化

イ)2016年大統領選で実業家ドナルド・トランプが共和党予備選で台頭

a)移民問題を前面に主張、「米国第一主義」を掲示

I)強硬な主張は批判が殺到、しかし白人労働者層の支持を集約

II)民主党候補クリントンを打破し大統領へ当選

b)トランプ政権はNAFTAやTPPを批判

I)同盟国負担や軍事力強化を強調

II)従来の国際協調路線からの転換

c)2017年にパリ協定離脱

I)環境規制緩和によってエネルギー自立を促進

d)米中関係は、オバマ政権期の協調路線から競争へと移行

I)関税措置など直接的な対中強硬策を展開

ウ)2021年発足のバイデン政権

I)就任初日にパリ協定復帰を宣言

II)気候変動を外交の中核に固定

III)環境重視外交は産油国との関係を複雑化



Ⅱ. トランプ大統領の登場



ア)大統領に就任後、ドナルド・トランプは従来の政治家とは別個

a)手法とコミュニケーション戦略で政治を操作

b)既存政治やメディアに強く対抗

I)一方、柔和で人あたりの良い側面

Ⅱ)二面性が国内外での評価を複雑化

b)就任式参加者数や不正投票

I)政策とは直接関係の薄い論争

c)支持率も就任後から低迷

I)国内政治の分断の深刻さを露呈

d)元トランプ政権の国家安全保障担当大統領補佐官のジョン・ボルトン

I)トランプは対面では相手の話を尊重して傾聴

Ⅱ)個人的な共感や信頼関係を重視



イ)トランプ政権の特徴は、こうした個性が外交姿勢にも反映

a)とりわけ米中関係では、中国を最大の競争相手と位置づけ

I)貿易不均衡や技術覇権の強硬姿勢

II)関税引き上げなどの措置は「米国第一主義」を体現

III)同時に国際経済秩序を不安定化

b)中国は再生可能エネルギー投資や脱炭素政策を加速

I)米国が国際協調から距離を保持

II)中国が存在感を向上

III)米中の主導権争いを一層鮮明化

c)トランプの登場は、国内の分断を深化

I)米中対立を軸とする国際秩序の緊張を顕在化

Ⅲ.オバマ大統領とトランプ大統領の政策の違い

ア)オバマ政権とトランプ政権の政策の違い

a)特に外交分野において顕著

b)オバマ政権は多国間主義と国際協調を重視

I)同盟国や国際機関との連携から国際秩序の安定を計画

c)トランプ政権は自国利益を最優先

I)取引的な外交姿勢

Ⅱ)トランプは選挙戦でNATOや日米同盟への負担不均衡を批判

Ⅲ)就任後は方針を修正

Ⅳ)「力による平和」を掲示

Ⅴ)同盟の戦略的価値を再評価

Ⅵ)NATOの集団防衛体制を支持

Ⅶ)日本や韓国との同盟も維持



イ)軍事面では、トランプ政権はオバマ政権よりも強硬な姿勢

a)2017年のシリア空爆や、アフغانستانへの増派決定

ウ)日米関係は、トランプは安倍首相との早期会談

a)同盟重視の姿勢を明確化

I)尖閣諸島が日米安保条約第5条の適用対象と確認

エ.a)北朝鮮政策では、オバマ政権の戦略的忍耐

b)トランプ政権は軍事的圧力と二次的制裁を強化

オ)2025年に発足の第2次トランプ政権は、移民対策や化石燃料開発の拡大

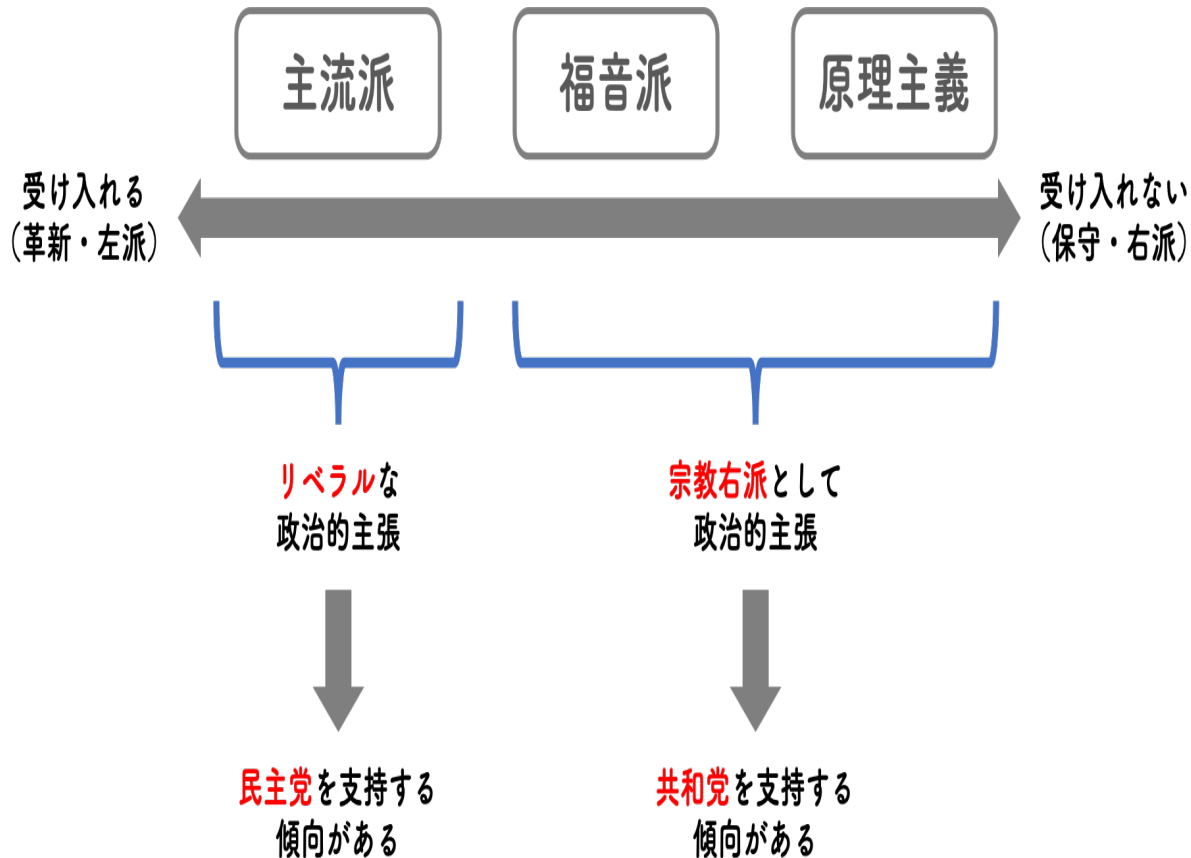
a)米国第一主義を一層鮮明化

カ)オバマ政権の協調外交と対照的に、トランプ外交は力と取引を重視



今後の展望

《『聖書』の近代科学的解釈をどこまで受け入れるか？》



ア)今後のアメリカが必要

a)オバマのような調整型のリーダーか、トランプのような対決型のリーダーか

b)トランプの肯定的評価の背景には、彼が「既存の政治家とは異質の存在」

I)支持者は、不動産業で成功の実績

II)「家族を大切にする価値観」や中絶反対

III)キリスト教的生命尊重の立場を評価

IV)退役軍人支援や医療政策への対処

V)ポリティカル・コレクトネスなど無関心の率直な発言

VI)「本音を代弁する存在」として体制不信層の支持を獲得

c)一方、オバマの肯定的評価は、対話と傾聴が政治の中心

I)選挙活動では、別個の意見の人々との対話を重視

II)政治的対立を相互理解によって克服

III)民主党予備選後には、競争相手クリントン陣営への感謝を表明

IV)党内融和を優先

イ)以上から、私はオバマの様な調整型のリーダーを支持

a)トランプは、既存政治の国民の不満を可視化

b)その手法は社会的分断を深化、民主主義で大切な信頼と合意形成を損失

c)多様な現代アメリカにおいては、対立を煽る政治×

d)対話と協調による国内外の安定

I)オバマ型のリーダーシップこそ必要

